

## 館山海軍航空隊と青山学院水泳部合宿所～アジア太平洋戦争開戦をめぐって

佐藤隆一（青山学院高等部地理歴史科教諭／博士[歴史学]）

関東大震災からの復興事業としてスポーツ振興に力を入れていた青山学院は、校内にプールがなく、他の競技に比べて恵まれていなかった水泳部のための校外施設として、1926年、千葉県館山市に合宿所を建設した。豊津小学校の跡地約1,500坪に合宿室80畳、職員室8畳、予備室6畳、食堂、炊事室、炊事人居住室などを備えた、木造平屋建ての合宿所であった。土地購入やその後の運営については、地元の有力者である鈴木病院々長鈴木勝太郎氏、町会議員津田梅吉氏、小学校教員高橋理記氏らの絶大な協力があり、施工は清水組（清水建設）が担当した。

『青山学報』第46号（1926年9月28日付）には、「合宿所は高地にあって、静かな館山湾を一望することができる。ここから約1丁（約110m）を下れば汀に達する。前面には玉藻のような高ノ島がある。海水浴客が足を止める茶亭があり、足場は悪くない。高ノ島には水産講習所の実習所のようなものがあって、魚貝類の拾得を厳禁している。海を5～6丁隔てて、沖の島がある。ここは交通が不便なので、人の姿が希である。島影には白帆を張るヨットの影も見える。合宿所の裏は赤山で、豊津公園がある。山には夏季になると、山百合の白い花がいっぱいに咲き乱れる。夜は沖合はるかに漁火がちらつく。極度に静寂なよい所である。」と紹介されている。

楽しい共同生活を繰り広げてきた館山合宿所であったが、1941年の夏季合宿を最後に海軍への譲渡を余儀なくされる事態となった。『青山学報』173号（1942年10月1日付）には、「寄宿舎の前方に海軍航空隊が設置され、水泳に不便を感じる様になったので、海軍への譲渡の話も持ち上がったが、何時とはなしにお流れになってしまった。ところが1941年12月、海軍の方から譲渡の話が持ち出され、急速に進展し、1942年1月20日付を以て手続を完了した」とある。1930年の館山海軍航空隊（以下「館空」）開隊時ではなく、その後のアジア・太平洋戦争開戦時に急きょ譲渡が行われたことは、一体何を意味するのであろうか。関連史料が皆無に近い状況ではあるが、「館空」と青山学院合宿所退去について考察してみたい。

1928年より埋め立て工事により、1930年に「館空」が開隊した。海からの西風を強く受ける「館空」は、空母に見立てた艦上攻撃機のパイロット養成基地となり、高度な離着陸の訓練が展開された。仮説ではあるが、真珠湾を想定した訓練が行われたのではないかと推察されている。

1941年9月には、海軍初の落下傘部隊として精鋭1,500名が集められ、上空300mからの降下訓練が約2か月間行われた。同年12月に台湾で最終調整の後、翌42年1・2月にセレベス島・ティモール島への奇襲攻撃を成功させている。これも合宿所退去の時期に重なる。

合宿所があったと特定される場所は、「館空」の付属施設である赤山地下壕に隣接している。総延長約2kmの大規模なものであり、司令部・奉安殿・病院・発電所・格納庫・燃料貯蔵庫などを備えている。関係資料がほとんどないために、詳細は不明確なままである。

館山市教育委員会などの主な表示では、つくられた時期ははっきりとはわからないとしながらも、本土決戦を念頭において1944年から掘り始めたのではないかと想定している。その理由として、①大規模な地下壕が1941年のアジア・太平洋戦争発生以前につくられた例はないとされる、②軍部が本格的に防空壕をつくり始めたのは1942年以降である、③1944年以降に館山海軍航空隊の兵士たちによって壕が掘り始められたという複数の証言がある、などをあげている。

①②③については、松代大本営（長野県、1944年10月着工）、日吉台地下壕（神奈川県、1944年8月着工）、浅川地下壕（東京都、1944年9月着工）など、確かに一連の枢要な地下要塞は本土決

戦に備えて敗戦間近い時期に集中してつくられている。しかし、①②については一般論の範囲を出るものではなく、赤山地下壕の工事開始時期を確定するに足る決定的な根拠とはなり得ないとする。一方、③については複数の兵士の証言ということで、時期を特定する根拠となる可能性はあるのではないかと思う。しかし、この証言とは相矛盾する証言もある。それは、④1930年代半ば頃から極秘に建設され、掘った土砂は海岸の埋め立てに使用されたとする証言である。今のところ③④も確たる記録に基づくものではなく、仮説の域を出ない。

ここでキーポイントとなるのが、赤山地下壕に隣接する青山学院水泳部合宿所の譲渡である。

最近見つかった新資料によると、1941年9月上旬に海軍から譲渡と立ち退きの緊急通告があり、学院長と主事らのみで極秘に対応していたことが分かった。先述の『学報』173号で対外的に公表していた時期より実際には早く、強制的に買収がされたようである。これは、③のように敗戦間近い1944年から赤山の工事が始められたという説とは、明らかに辻褄が合わない。

また、赤山地下壕周辺の住民に聞き取りをおこなったところ、以下の貴重な証言が得られた。⑤合宿所は現在の館山市営プールのエリアにあった。周辺には地下壕の出入り口が設けられていた。海軍への譲渡後しばらくは空き家であったが、その後兵舎として使用された。戦後間もなく寮は取り壊され、調理場兼風呂場は残ったが、1950年のプール造成によりすべて解体された。⑥赤山には、1930年頃に方位測定所が設けられた。近辺の住宅街では、1938年から海軍による本格的な土地の買収が行われ、立ち退いた家が多かった。同年頃から、海軍が赤山地下壕を使用していたようだ。軍の管理下にあるとはいえ、当時の子供たちは比較的自由に地下壕に入ることを許された。1941年頃からトラックが動き出し、さかんに燃料などの物資が下されていた。

⑤⑥については、符合するいくつかの材料がある。例えば、⑤の兵舎については、1943年頃の作成と推定される赤山を中心とする軍事施設を示した地図（防衛省防衛研究所所蔵）には、ちょうど合宿所の位置に「館空五六兵舎」「兵員防空壕」と記され、これに面した地下壕の出入り口を確認できる。⑥については、赤山の燃料タンク跡は現在も残っており、ここから海辺に向かいトラックのレールが敷かれていた道筋は斜度が均一なスロープをなしており、道路との交差点には踏切遮断機のコンクリートの基礎台が残存している。

これらの内容から、赤山地下壕は開戦時の1941年末にはすでに稼働していた可能性が高くなり、海軍が機密を守り戦争を遂行するためにも、隣接する青山学院水泳部合宿所の買収は急ぐ必要があったのではないかと考えられる。よって、赤山地下壕は、前掲の松代大本営など本土決戦に備えて突貫工事が進められた一連の地下壕とは性格を異にし、開戦当初から「館空」と一体化して機能する要塞として、早い時期に掘削が進められたと考える方が妥当ではないかと思われる。また内部のツルハシ痕を見ても、専門部隊によって丁寧に掘られたものと考えられる。

1944年以降に掘削開始したとする③の証言については、おそらくは敵機の空襲や本土決戦を想定して、赤山地下壕とは別の防空壕を近辺につくる工事ではなかったかと考えられる。いずれにしても依然として不明瞭な点が多く、今後は確たる史料の発見やさらなる証言を期待したい。

さて、館山の豊かな自然と地元住民との温かい交流のなかで培われてきた青山学院の水泳合宿も、戦争遂行の国策によりあえなくその終わりの日を迎えた。館山で過した平和で楽しい日々の数々は、日本社会の激動の歩みのなかで埋もれてしまった、ささやかな歴史の1ページである。

(昭和2年度) 房州館山ニ於ケル青山学院中学部  
水泳部 (東京湾要塞司令部検閲済)

